

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：32688

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02011

研究課題名（和文）EUの循環移民政策と移住労働者の国籍変更戦略 - イタリアの東欧出身者を事例として

研究課題名（英文）EU Policies on Circular Migration and Strategies of Migrant Workers Who Change Their Citizenships: The Case of Eastern Europeans in Italy

研究代表者

中力 えり (CHURIKI, Eri)

和光大学・現代人間学部・教授

研究者番号：50386520

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：移民の送り出し国であるモルドヴァと移民の受け入れ国であるイタリアで現地調査を実施した。その結果、EU域外国であるモルドヴァからイタリアに移住した労働者のなかには、EU加盟国であるルーマニアの国籍取得者も多く、他の国籍取得者もいること、またイタリアの国籍を取得した（しようとしている）人も複数いることが確認できた。イタリアで家族統合を果たし、家を購入して安定した生活を送るなど、定住化の傾向もみられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

移住労働者をめぐる問題がとりあげられる際には、移住に伴うさまざまな負の側面が指摘されることが多い。しかし、移住先に長期間滞在し、比較的安定した生活を送ることができている者からは、移住に伴う苦勞だけでなく、正の側面も強調されていた。そうした移住の正の側面にも着目していく必要性、また移住労働者のなかには複数の国籍を取得している者もいることから、その出身地を固定的に捉えないで分析することの重要性を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：Field research was conducted in Moldova, the country of origin of the migrants, and in Italy, the country of destination. The research results indicate that among the workers who migrated to Italy from Moldova, a non-EU country, many had acquired Romanian citizenship, which is the citizenship of an EU member state, and some had acquired other citizenships. Moreover, several of them had already acquired Italian citizenship or were trying to do so. Furthermore, there is a tendency for migrants to settle in Italy, often as a result of family reunification, the purchase of a house, and the pursuit of a stable life.

研究分野：社会学

キーワード：移住労働者 循環移民 国籍 家事労働 モルドヴァ EU

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者および分担者がこれまで科研費を得て行ってきた2つの研究の成果を発展させるかたちで構想されたものである。まず、(1)「EUにおける移住女性と家事・介護労働」をテーマとした研究では、フランス、ドイツ、そしてイタリアを中心に共同研究者で分担しながら現地調査を継続して実施し、家事・介護労働に従事している移住女性たちをとりまく状況や制度について明らかにした(H21～H29年度まで実施した3つの基盤研究(A)、研究代表者：伊藤るり)。すなわち、移住家事・介護労働者の就労先国における移民政策、社会政策上の位置づけ、就労状況と内部の階層性、支援状況、EU/国家/ローカルの3水準で展開される移住女性とケアをめぐる政治について、現地調査をもとに明らかにした。

また、(2)「ヨーロッパの辺境地域における文化の政治が表象する社会空間」についての研究では、「社会空間」(social space)を社会的実践の場所、日常の実践、歴史的物語に結び付けられた実践、交換価値としての機能によって再構造化される対象と再定義し、ヨーロッパの境界地域において、実証的な分析を行った(H26～H28年度基盤研究(C)、研究代表者：定松文)。その際、境界地域の1つとしてモルドヴァで現地調査を実施したが、そこで、女性がイタリアに移住して家事・介護労働者として働いているケースが多いことが確認できた。そして、移住するにあたって、歴史的、言語的なつながりのあるルーマニアの国籍を取得している場合があることが明らかになった。すなわち、EU域外国の出身者が、EU域内で合法的に働くための手段として、国籍を変更しているケースがあるということ把握することができた。さらには、移住先のイタリアで、イタリアの国籍を取得する者がいる状況も浮かび上がった。

上記(1)と(2)の研究がつながりをもつことから、その実態についてより詳しい調査研究が求められると判断し、本研究を構想するに至った。

### 2. 研究の目的

本研究は、(1)近年EUでも積極的に進められている循環移民の制度化の背景と実態について把握すると同時に、(2)EU諸国で合法的に働くために、時には国籍を変更して移住する人々の移動戦略がどのように展開されているのかを明らかにすることを目的として実施した。

(1)循環移民政策は、近年、国境を越えた人の移動をどのように規制し、送り出し国、受け入れ国、そして移民自身にとって互恵的なものにするにはどうしたらいいのかが国際的に問われるようになるなかで、2005年より「国際的移住問題に関する世界委員会」(GCIM)や欧州委員会により、1つの解決策として積極的に模索されるようになってきているものである。研究者による実証的な研究もおこなわれるようになってきているが、用語が明確な定義を欠いた状態で使われてきたことや、そうした現象を捉えるには丁寧な調査が必要なこともあり、まだ社会学的な研究の蓄積が十分とは言えない状況にある。そこで本研究では、EUや加盟国政府による循環移民の制度化の試みの背景と実態について、より詳しく把握することを1つの目的とした。

また従来の研究では、(2)移住労働者は出身地別に分類され、分析されることが多いが、本研究は移動の過程で他の国籍を取得し、複数の国籍を保持しているケースにも着目し、移住労働者によるダイナミックな移住戦略がどのように展開されているのかを明らかにすることを目指した。すなわち、政府による循環移民の制度化の試みがある一方で、従来加盟国出身者/新規加盟国出身者/域外国出身者といった市民権上の地位の違いによる差異の自明性、固定制を再考する必要性を示すことをもう1つの目的とした。

### 3. 研究の方法

(1)「循環移民」の制度化の試みとその背景や影響については、EU共通政策や二国間協定などについての資料を収集するとともに、政府関係機関や移住労働者の支援団体、研究者などへの聞き取り調査を実施して、分析することとした。

(2)イタリアで働く東欧諸国出身の移住労働者の移動戦略の実態については、送り出し国と受け入れ国双方で現地調査を実施して、解明することとした。非正規滞在者の移動戦略だけでなく、国籍変更という方法により、EU域内/域外の壁やEUの従来加盟国/新規加盟国の壁を合法的に越えようとする者にも焦点を当てることとした。

東欧諸国出身の移住労働者の調査は、特にモルドヴァの出身者を対象として実施することとした。それは、モルドヴァ出身者でルーマニア国籍を取得する者が多数いることが先に実施した研究により明らかになっていたためであり、また研究分担者の中島が、調査を実施するうえで必要なネットワークを長年築いてきており、ルーマニア語も習得していることによる。

移住労働者の送り出し国であるモルドヴァでの調査は、政府機関(厚生労働省、外務・欧州統合省)や国際機関(国際移住機関：IOM)、研究所、大学、NGOなどで実施し、関係者や研究者に移民政策や同国出身者の移住労働の実態についてインタビュー調査を行うこととした。また、実

際にイタリアで家事労働に従事した経験があり、現在はモルドヴァに帰っている女性にも、聞き取り調査を行うことを目指した。

移住労働者の受け入れ国であるイタリアでの調査は、ポローニャで実施することとした。ポローニャを調査地としたのは、ルーマニア正教会にモルドヴァ出身の神父があり、その協力が得られることが期待できたからである。神父やその妻、そして1.5世代の若者が次世代育成のために結成した団体の代表に加え、ルーマニア正教会に集うモルドヴァ出身者に聞き取りを行うことを目標とした。ルーマニア正教会では、バスを利用した日帰りの巡礼も定期的に行われているが、そうした巡礼に同行して参与観察を行うとともに、できるだけ多くの参加者に聞き取り調査を行うことも目指した。

#### 4. 研究成果

移住労働者については、非正規滞在者の権利保障に着目した研究が多く行われている。これに対し本研究は、政府による循環移民の制度化の試みがある一方で、移住労働者によるダイナミックな移住戦略がどのように展開されているのかを明らかにすることを目的とした。すなわち、移住をするために、そして移住先の国に滞在する上で有用な国籍を実際に取得しているのか、複数の国籍を保持することで、どのように生活を安定させようとしているのかを、現地調査をもとに明らかにしようとした。

移住労働者の送り出し国であるモルドヴァでの現地調査は、2019年3月に実施した。その結果、政府は循環移民を促進しようとしているものの、頭脳流出が若年層を中心として盛んにみられ、人口減少に歯止めがかかっていない現状が確認できた。移住をきっかけとして離婚に至るケースや子どもが置き去りにされてしまうこともあり、大きな社会問題となっている実情が把握できた。移住先や就労状況については男女で違いがあり、女性はイタリアをはじめとしたEU諸国で家事・介護労働に従事することが多く、男性はロシアやイスラエルで建設労働などに就く傾向がみられるとのことだった。イタリアで家事労働に従事していた女性は、多くの困難に直面した経験を語った。重国籍に関しては、ルーマニア国籍を取得している者が多いものの、ブルガリアなど、他の国の国籍を取得しているケースもあることが明らかになった。また、移住先の国籍取得の実態についても、知見を深めることができた。総じて、移住労働者の送り出し国であるモルドヴァでの調査では、移住に伴って生じる負の側面やさまざまな課題が浮き彫りになった。

その後、移住労働者の受け入れ国であるイタリアで現地調査を行うことを予定していたが、コロナ禍で渡航が難しくなり、実現したのは2023年9月となった。現地調査の結果、教会が中心となってモルドヴァ出身の移住者たちの行政手続きを手伝ったり、精神面も含め、安定した暮らしが営めるようにさまざまな支援を行ったりしていることが確認できた。イタリアに既に長期間滞在している（または他のEU加盟国での滞在经过してイタリアに移住した）モルドヴァ出身者に対して実施した聞き取り調査では、家族統合を果たし、子どもを現地の学校や高等教育機関に通わせ、家を購入するなど、安定した生活を送っている者が少なくないことが明らかになった。移住に伴う苦労は経験しているものの、ルーマニア正教会の支援もあり、現在では正の側面を強調する様子もみられた。当初は正規の滞在許可を持たずに移住したという者もいたが、正規の滞在が可能となるルーマニア国籍を取得している者が実際多くいることが確認できた。さらにはイタリア国籍を取得した（しようとしている）者が複数いることも明らかになった。子の世代では、大学を卒業し、他のEU諸国に移住して、滞在国の国籍取得を目指している者もいた。

本研究では、そうした移住の正の側面にも着目していく必要性、また移住労働者のなかには複数の国籍を取得している者もいることから、その出身地を固定的に捉えないで分析することの重要性を明らかにすることができた。また、自分および家族の生存戦略として国籍の道具的側面が積極的に追及されていることも確認できた。こうした傾向は出身国の社会経済情勢が不安定な場合や国際情勢の影響を受けた場合に顕著となる可能性があるが、近代国家における国籍の役割について再考する必要性も示している。

本研究を遂行するに当たっては、コロナ禍の影響を受けることになり、現地調査を実施できなかった年度もある。しかし、従来であれば日程的に出向くことが難しかった国際セミナーや国際シンポジウム、関連イベント等にオンラインで参加することができた。また、ビデオ会議システムを使用した研究会に、イタリアの社会政策や移民政策、また移住労働者の問題に詳しい研究者や、ブルガリアを中心とした東欧からの移住労働者のおかれた現状や課題について詳しい研究者を招いて、近年の動向について、またコロナ禍の影響について専門的な知識の提供をしていただき、意見交換を行うことができた。

研究開始後に、ウクライナ情勢の影響も考慮する必要が生じた。すなわち、これまで「送り出し国」であったモルドヴァが予期せず「受け入れ国」になったことで、循環移民の状況も大きく変わる可能性があるのか、また、EU加盟候補国となったことの影響も検討する必要性が生じた。

コロナ禍やウクライナ情勢がモルドヴァの人々の生活の実情や移住労働者の動向にどのような影響を与えたのか、またルーマニア国籍を取得する人々の具体的な事例や複数の国籍を持つ人々が利便性やアイデンティティの問題をどのように捉えているのか、そして言語をめぐる問題（ルーマニア語とモルドヴァ語の関係、ロシア語の使用状況）等については、非営利任意団体モルドバジャパンの広報担当者にお話をうかがうことができた。また、モルドヴァとビデオ会議システムをつなぎ、元モルドヴァ共和国ルチンスキ大統領の首席補佐官だった方にも聞き取り

調査を行うことができた。ウクライナからの避難民がモルドヴァに大勢流入した直後の様子やその後の支援の実情、またモルドヴァ出身の移住労働者の近年の動向、そしてモルドヴァが EU 加盟候補国になったことによる変化等についてご教示いただいた。

本研究の成果は、学習院女子大学国際学研究所で 2024 年 1 月に開催されたセミナー(「越境するヨーロッパの人々」)で、研究代表者である中力が「EU における人の移動と国籍取得の実態」について、そして研究分担者である定松が「トランスナショナル家族の分離と再統合」について、モルドヴァを事例として報告した。モルドヴァとイタリアで実施した聞き取り調査の結果は、さらに分析を進め、得られた知見を論文としてまとめて公表する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 中力 えり	4. 巻 12
2. 論文標題 EUの循環移民政策と移住労働者 モルドヴァの事例を通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 和光大学現代人間学部紀要	6. 最初と最後の頁 83-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中島 崇文	4. 巻 21
2. 論文標題 モルドヴァ共和国の歴史教科書における現代史	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学習院女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 83-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 中力 えり
2. 発表標題 EUにおける人の移動と国籍取得の実態
3. 学会等名 学習院女子大学国際学研究所主催セミナー「越境するヨーロッパの人々」
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 定松 文
2. 発表標題 トランスナショナル家族の分離と再統合 モルドヴァ出身者の事例から
3. 学会等名 学習院女子大学国際学研究所主催セミナー「越境するヨーロッパの人々」
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 岸 政彦、稲場 圭信、丹野 清人編著、櫻井 義秀、伊達 聖伸、横井 桃子、板井 正斉、高瀬 顕功、塩原 良和、高谷 幸、定松 文、高畑 幸、鍛冶 致、人見 泰弘	4. 発行年 2023年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 290
3. 書名 岩波講座 社会学 第3巻 宗教・エスニシティ	

1. 著者名 佐原 徹哉編著、木村 真、六鹿 茂夫、柴 宜弘、山崎 信一、中島 崇文、金原 保夫	4. 発行年 2024年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 320
3. 書名 YAMAKAWA SELECTION パルカン史 下	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	定松 文  (SADAMATSU Aya)  (40282892)	恵泉女学園大学・人間社会学部・教授   (32694)	
研究分担者	中島 崇文  (NAKAJIMA Takafumi)  (90386798)	学習院女子大学・国際文化交流学部・教授   (32699)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------